やまと万葉がたり

駅路に　引き舟渡し　直乗りに
妹は心に　乗りにけるかも

作者未詳(巻十一・二七四九)

この歌は、舟に寄せて歌い手の思いを述べた歌の一つで、後半の「直乗りに(ぴったりと隙間無く)彼女の存在が私の心に乗った」を引き出すために、前半の「駅路に引き舟を渡すように直乗りに(まっすぐ進む)」という表現を用いています。「直」の意味が前半では「直線的に」、後半では「直接的に」と異なっており、「直乗り」という両義性のある言葉を用いて後半部を導き出す点が表現上の特徴です。

駅路とは、中央と地方をつなぐ交通・通信手段として古代の日本国家が全国に設けた道路です。駅馬と呼ばれた早馬が高速で走行できるよう、可能な限り一直線に造られました。公的な使者の証として駅使に与えられた駅鈴を鳴り響かせながら駅路を一直線に疾走する駅馬の姿は、古代の人々にとって印象深かったらしく、『万葉集』には駅馬を主題とする歌が複数あります(巻十四・三四三九番歌、巻十八・四一一〇番歌)。直乗りにまっすぐ進むというこの歌の前半部は、当時の人々が直線状の駅路をよく見知っていたことを踏まえた表現と言えます。

この歌からは、駅路が河川と交差する地点に「引き舟」が設けられていたこともわかります。引き舟とは、河川の両岸に綱を張り、綱をたぐって対岸に渡る仕組みの舟を指します。舟の進路を安定させるため張力を保つよう、綱は一直線に張られました。駅路と引き舟の綱がともに直線状であることが、「直乗り」という表現の効果を強調しています。

古代の日本では、河川を渡る施設としての橋は限られた重要な場所にしか設けられなかったとされます。橋以外の渡河手段について記した古代の文献は少なく、この歌は駅路の渡河点に引き舟が設けられていたことを示す史料として、貴重な内容を伝えていると言えるでしょう。

(県立万葉文化館主任研究員・竹内亮)

【訳】駅路に引き舟を渡してまっすぐ進むように、彼女は私の心にぴったり乗ってしまったよ。

やまと万葉がたり

山吹の　にほへる妹が　はねず色の　赤裳の姿　夢に見えつつ

作者未詳（巻十一・二七八六）

当館の万葉庭園では山吹が咲き、鶯の鳴き声が響いています。一般的なお花見の時期を過ぎてなお、目にも耳にも春を楽しむことができます。

今回の歌は、作者がわからない恋の歌を集めた巻十一に載る、男性が女性を思う歌です。

この歌では実際に山吹の花を見ているわけではなく、山吹のようにあでやかな女性、と喩えに用いています。

「にほへる妹」を導く例としては、有名な「紫のにほへる妹を憎くあらば……」（巻一・二一）と、今回の例があるのみです。女性の輝きを印象づけるのに紫と山吹が用いられています。紫は最も高貴な色として知られます。山吹は愛しい人を重ね合わせる植物として好んで詠まれました。

「はねず」は淡い紅色の花をつける庭梅のことと言われます。『万葉集』に4例ありますが、この歌以外の3首は「うつろふ」すなわち色あせることを歌います。「赤裳」というだけでなくあえて「はねず色の赤裳」としているのは、女性が色の薄い裳を着用している姿であると同時に、恋の不安定さも暗示しているのかもしれません。

さて、この歌では愛しい女性が夢に見えたと歌います。『万葉集』の中では、相手が自分を思ってくれていたら夢に見える、とする歌が多くあります。一方、自分が思っているから相手が夢に現われる、という例もあります。同じ巻十一の中にも両方の場合があります

【訳】山吹のように照りはえるあの子の、はねず色の赤裳をつけた姿が、しきりに夢に見えて。

が、今回は作者の男性の思いが強そうです。

『万葉集』に夢の歌が100首ほどある中で「姿」が見えたと歌う例は4首のみで、今回のように具体的な姿を見る歌はほかにありません。山吹の黄色、はねずの桃色、赤裳の赤色が順に連想され、色彩が印象的です。綺麗な色つきの夢を見たようですね。

（県立万葉文化館主任研究員・阪口由佳）